視察日時	令和７年５月２２日（木）午後１時３０分 ～ 午後５時
視　察　先	徳島県神山町（説明：認定ＮＰＯ法人グリーンバレー）
視察項目	創造的過疎・神山のまちづくりについて
視察概要	（１）創造的過疎・神山プロジェクトについて 　徳島県中部に位置する神山町は、人口 4,623 人（令和７年３月１日時点）、面積は 173.3 ㎢で森林面積が 86％、高齢化率は 52.3％である。 　ＮＰＯグリーンバレーのミッションは、「日本の田舎をステキに変える！」であり、ビジョンとして以下の３つを掲げていた。 ● 人をコンテンツにしたクリエイティブな田舎づくり ● 多様な人が知恵を融合するせかいのかみやまづくり ● 創造的過疎による持続可能な地域づくり 　「創造的過疎（Creative Depopulation）」とは、『人口減少の現状を受け入れ、人口の中身を変える。』ことであり、具体的には、若者や創造的な人材の誘致によって人口構造の健全化を図るとともに、多様な働き方が可能なビジネスの場としての価値を高めることによって、１次産業のみに頼らない持続可能な地域を目指していた。 　過疎地における課題は、「雇用がない・仕事がない」「若者に魅力ある仕事の欠如」であるが、これらの課題を解決し可能性を開くため、神山町では、1990 年代から各種プロジェクトに取り組んでいた。30 年に及ぶ「創造性ある人材」の集積が、変化の源泉とのことであった。 　1991 年に、ＮＰＯグリーンバレーの前理事長の大南氏が、地元小学校に保存されていた、戦前の 1927 年にアメリカから贈られてきた「青い目の人形」の贈り主を探し当て、里帰りを果たす取り組みを実現した。この仲間との成功体験の共有を機に、1992 年に神山国際交流協会が立ち上がり、「国際交流」が始まった。 　1999 年には、「神山アーティスト・イン・レジデンス」を立ち上げ、国内外のアーティストが約２か月半、町内に一時滞在し、野外作品の創作活動が始まった。その活動から移住者が生まれ、移住者のつながりで移住する人が増えてきた。 　2004 年には、ＮＰＯ法人グリーンバレーを設立し、アート、移住定住、環境、働き方などの分野で活動を展開。具体的には、アドプト・プログラムと呼ばれる道路の清掃活動、神山町移住支援センターの運営による移住定住支援、コワーキングスペース「KVSOC 神山バレー・サテライトオフィス・コンプレックス」の運営、「神山農村環境改善センター」の指定管理事業、大粟山やオニヴァ山（通称）での森づくりなどを展開。

	（２）行政等との関わりについて 　2004 年に町に光ファイバー網ができ、働く場所を自由に選べる人に注目した。一定期間、地域に滞在する取り組み「ワーク・イン・レジデンス」（2008 年）のアイデアが生まれ、古民家を改築し、多様な人材が集うサテライトオフィスが誕生した（2010 年）。サテライトオフィスの「えんがわオフィス」（2013 年７月）では、放送局と結んで映像関係の業務を行っている。商店街は空き家の利活用が進み、町では子育て世帯向けの集合住宅８棟（家族 18 世帯＋単身者６人入居）を建設し、木質バイオマスボイラーの共用施設コモンハウスが附属している（2016 年）。城西高校神山分校では、学科再編し、環境デザインと食農プロデュースの２コースとなり、町営の寮で、県外の生徒を積極的に受け入れている。 　また、神山町で行われている「フード・ハブ・プロジェクト」とは、小さな農家と小さな消費を結ぶ、「農業と食文化の地域内循環システム」であり、食農教育ＮＰＯを設立し、2018 年度のグッドデザイン賞金賞を受賞している。 　他にも、起業家を育成するため、2023 年に神山町に開校した高等専門学校「神山まるごと高専」は、私立の全寮制の高専である。企業や個人から寄附金を調達して設立。全国から集まった約 80 人の学生のために、世界で活躍する起業家やアーティストが毎週集い、起業に必要な知識や起業家精神を学べる高専となっている。企業から約 100 億円の寄附金を募り、運用益を学生の学費と寮費にあて、無償の学校を実現している。入試倍率は、2023 年度が併願を含め約 10.8 倍、2024 年度は約 10.6 倍とのことであった。 ［質疑応答］ Ｑ．移住してくる方達は、ここを終の棲家にしようとしているのか。それとも、ある一定期間だけここにいようとしているのか？ Ａ．終の棲家にする覚悟は求めていないが、結果的にはあるかもしれない。ただ、年を重ねると、移住者の親の介護問題が出てきて、長くいてくれた人が離れざるを得ないケースも考えられる。そのため、親世代の移住も含めた福祉政策、制度設計が大事だと考える。 Ｑ．現在、十数社がサテライトオフィスを構えているとのことだが、過去には撤退したという事例もあるのか？ Ａ．そういったケースもある。ただし、来るものは拒まずで、一度出てから、また帰ってきてもいいよと門戸を開いている。そのため、実際に戻ってきたケースもある。

所　　感 （意見・感想・今後の課題等）	地方のどこにでもある小さな町で、なぜ新たな展開が次々と起こるのか。 成功の秘訣は、働き方の自由度が高いこと。 光回線が地域全域に整備され、都市部とのオンラインで業務ができることから、サテライトオフィスが生まれている。季節やプロジェクト単位でも働く環境をつくっている。 さらに、地域の活動的な人材がいること。 古民家や空き店舗を活用し、カフェやゲストハウスが生まれ、芸術作品の展示販売、ユニークな店舗など、起業人材が集まっている。起業家育成では、世界で活躍する起業家やアーティストらが集う、授業料無償の高専があること。 そして、地域内の経済循環を発揮していること。 昼食会場となった「フード・ハブかま屋」は、「地産地食・Farm Local, Eat Local」を合言葉に、地域で一緒に食べることで関係を豊かにし、神山の農業と食文化を次の世代につないでいくことを目指す。「かま屋通信」を毎月発行し、地域内の農産物や食材の利用率を高め、地域外から消費者が集まってくる。 徳島県神山町の研修では、地域活性化は、自由な働き方、起業人材、域内経済循環の３つの要素が合わさって、効果が発揮されることを学んだ。

報告者　総務常任委員会　加藤　鑛一